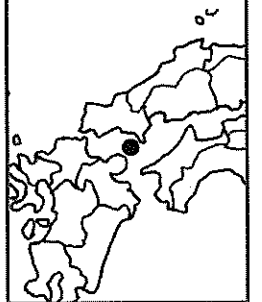


ルポ
にほんの
里
100選

山口県 祝島
ジャーナリスト
藤原 勇彦

第6回

原発に抗し海の暮らしを守る 自然エネルギー100%計画

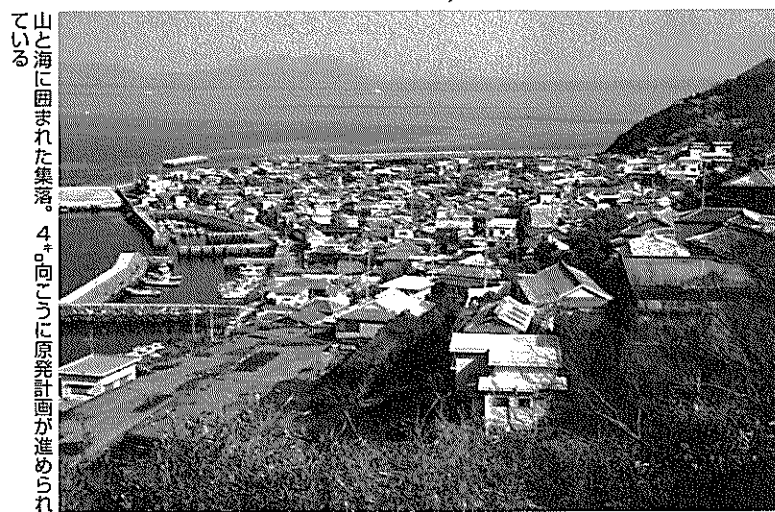


船着き場の目の前を、盛り上がるようにアジの大群が泳ぐ。「たぶんスナメリ（小型のイルカ）に追われて、岸に近づいてきたんだろう」。見ている人が、なにげなくつぶやく。子どもが1人、一生懸命、アジをやすで突こうと狙っている。浜でヒジキを干しているのは、竹林民子さん。薪を焚いて鉄釜で煮るヒジキは、「柔らかくっておいしいって……知り合いに頼まれて送るばかり。アメリカにもたくさん行ってるよ」。屈託なく笑う。

■自然の息吹と練り堀の美

海岸などから集めてきた大小の石を積み上げ、泥と漆喰で固めた練り堀は、島独特の景観だ。厚さ50センチもあり、台風や周防灘の強風から家を守る。小高い丘に建つ小学校は、立派な石垣に支えられている。地元教育委員会委員長・橋部好明さんによると「昔、島の人が杜氏に出て、村上水軍の末裔から仕入れてきた」という技法を駆使し、「とおど」と呼ばれる島内の結びが協力して、昭和の初年に組み上げたという。当時680人もいた生徒は、今5人。「今日はおだやかですが、ここらは海の難所で、1年の半分くらいは、しけです」と、橋部さんは語る。

山口県上関町祝島。周囲12キロ、人口492人の、『万葉集』にも歌われた、めでたい名前の瀬戸内の小島に、いま世間の注目が集まっている。東日本大震災に続く、福島第一原子力発電所の事故が、一つのきっかけだ。約4キロ離れた対岸、上関町長島の田ノ浦に中国電力が計画している上関原子力発電所



山と海に囲まれた集落。4キロ圏内に原発計画が進められている

建設に、島の住民は30年にわたって反対してきた。「祝島は昔からタイヤアジの一本釣り、タコ、イカの定置網が生活の糧。原発は、自然を壊し職場を奪う。お金（補償金）を出したからいいというものではない」。住民の9割が今でも建設に反対で、毎週月曜日に行われる島内デモは、すでに1000回を超えた。

■エネルギー自給の島へ

今年の1月、「原発を建てさせない祝島島民の会」が中心になり、「祝島自然エネルギー100%プロジェクト」を発表した。太陽発電や太陽熱を最大限有効活用し、バイオマスや風力を加えながら、10年先をめどに島の暮らしに必要なエネルギーの百パーセント自給・自立を目指すという試みだ。その主体として、一般社団法人・祝島千年の島づくり基金 (<http://www.iwail00.jp/>) の設立を申請中で、幅広く寄付を呼びかけている。

「基金」の理事、山戸孝さんは30代半ば。「反対運動を通じて、それなりに原発の安全対策を知っていたが、福島の事故には驚いた。必要なら、被災した子供たちを地元へ受け入れようと思った」と語る。干しヒジキ、

無農薬ピワ茶などの産品を扱う「祝島市場」を運営する、若手の働き手だ。代替エネルギーとして、島内では太陽光パネルの取り付けも始まったが、風が強く、取り付け可能なのは100戸程度の見通し。山戸さんによれば、代替設備の新設・普及だけでなく、何でも電気に頼る生活を見直していくことが、「島のエネルギー自立」への理念という。「ヒジキを薪で炊いて、(その薪を取り入れることで)耕作放棄地が荒れるのを防ぐのも、立派な自然エネルギー利用でしょう」。

■養豚が担う循環型生活■

氏本長一さんが営む島でただ一軒の養豚業も、循環型生活の一翼を担う。ブタ40頭を耕作放棄地に放牧し、雑草を食べさせて農地に回復させる。イノシシやサルなどの野生動物がおらず、伝染病が広まりにくい離島ならではの飼い方だ。家庭の生ごみ、魚の内臓、野菜くず、特産のミカン・ピワのくずなどを、島内7カ所のコンテナに投げ入れてもらい、朝、氏本さんが回収し、ブタの餌にする。「人の暮らしをフォローするのが、家畜の役割。放牧のブタは、健康で医薬品いらず。内臓まですべておいしく食べられる」とのこと。東京や京都の料理店に卸している。

「小さな島なので大規模化はしない。電力も、原発一基で何百万世帯に配電する大規模集約型より、個別分散型の小ぢんまりした自給体制のほうが、本当のセキュリティ

になるのでは」と氏本さんは考える。「小さなコミュニティで、日ごろから意思疎通を図りながらやっている島は、ベクトルが一方向へまとまりやすい」。外来植物の移入を防ぐために祝島自治会が採択した「生態系保全規則」は、法的な拘束力はないものの、住民が新しい動物を飼ったり植物を栽培する際、一旦、立ちどまって考えてもらう契機になっている。

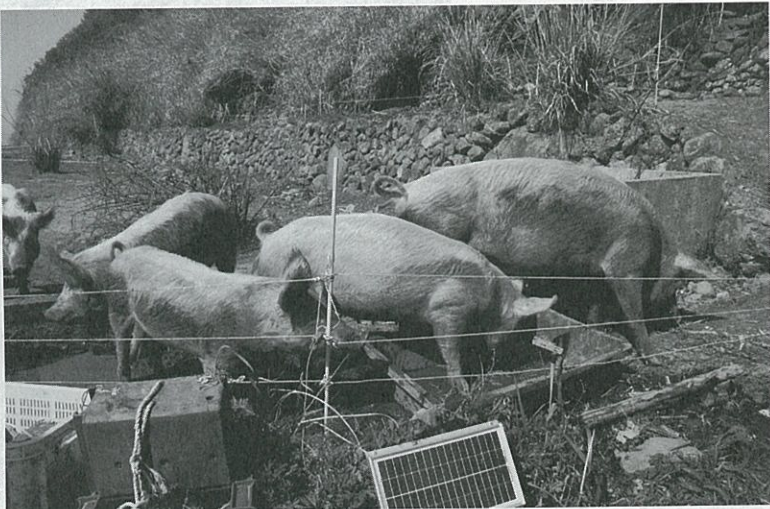
■原発阻止は短期的目標■

4月11日、山口県の柳井港から着いた定期船は、時ならぬ団体客で満員だった。目的は、島周辺の海域に生息する希少種の海鳥「カンムリウミスズメ」。前日、広島市で開催された「カンムリウミスズメと上関(瀬戸内海)の生物多様性」シンポジウムの参加者で、アメリカ、中国などの鳥類研究者や日本の環境保護団体など40人が、島からさらにチャーター船を出した。祝島と原発予定地の間の海は、海外にまで知られる自然の宝庫だ。

最近、島に来る若い人が、少しずつ増えている。氏本さん宅の離れで食堂を開く芳川太佳子さんは、昨年11月、広島からやってきた。氏本さんのブタの豚汁、採りたてワカメの木の芽和え……。すべて島内の食材を使ったメニューは島のお客さんにも人気だ。原発運動で島にきて、アルバイトをしながら滞在する若者もいる。ヒジキの手づくり、ピワの袋かけ、無農薬ピワ茶づくりなど「けっこ

う田舎で出稼ぎができる」と同時に、高齢化が進む島の労働力を補う。

福島原発の事故を受けて、中国電力は、原発建設の埋め立て工事を一時中断したが、追加調査は続けている。山戸さんは「原発阻止は短期的目標。さまざまな過程で、人情報、物が島を出入りし、新しい関係ができることが大事です。そのつながり生かして、今まで以上に環境と調和して生きてゆきたい」と、原発を超えた島の将来へ思いをはせている。



耕作放棄地にブタ40頭を放牧し、雑草を食べさせて農地に戻す循環型生活